

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	王 芸嫻 比較社会文化学専攻2013年度生		論文題目	中国語における因果関係を表す複文に関する研究 ～説明因果文、反事実仮定文及び疑念を表す推論文を中心に～
審査委員	主 査:	伊藤 さとみ 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 可
	副 査:	宮尾 正樹 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	和田 英信 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	中西 公子 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	本林 響子 准教授		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Linguistics)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

本研究は、中国語の複文について、その情報構造の特徴を考察したものである。取り上げた複文は、原因とその結果を表す“因为”文、仮定を表す“如果”文、事実を踏まえて推論を表す“既然”文である。これら三つの構文について、焦点が前件にあるか後件にあるか、また、どのような条件下で焦点を移動できるか、さらに、焦点が移動した際にどのような意味の変化が生まれるかを明らかにしている。以下、構文の種類に関わらず、複文の前件をp、後件をqと一括して称す。

第1章では、中国語の複文の分類に関する先行研究に基づき、本研究で取り上げる構文の位置づけを述べ、さらに、分析のための理論的枠組みを説明している。分析の概念には、前提と焦点があり、前提は会話の参与者双方にとって共有される知識と定義されるが、焦点については、新情報を表すことによる焦点と、他の要素を排除することにより強調される焦点に分け、前者を情報的焦点、後者を対比的焦点として区別することが述べられている。

第2章では、“因为”文を取り上げている。従来は、“因为”文のpは、前提であつてもなくてもよいが、qは、必ず前提であると言われている。そこで、この章では、焦点マーカーや副詞“才”がpを焦点化することにより、情報構造が変化する例を調べ、pが焦点となる条件は、「pならばqである」という因果関係が前提とされることであることを明らかにした。また、pを焦点にすることで、他の原因を排除する意味が強くとらされることを明らかにした。

第3章では、反事実を表す“如果”文について考察している。従来は、反事実“如果”文はpの否定を強調するもの、pの否定を表すもの、qの否定を表すものの三つに分類されると言われてきた。本研究はそれに対し、“因为……才”文に言い換えられるかどうかに基づき、新たに三つの分類を提案した。さらに、否定を使って前提を判別するテストを用いて、新しい分類では、それぞれに前提、焦点、会話の含意が異なることを示した。

第4章では、“既然”文を取り上げた。従来は、“既然”文は、pが前提であり、qが焦点であると言われてきた。だが、疑念を表す用法の“既然”文では、pの否定が情報的焦点となり、通常の“既然”文とは異なる情報構造になることを明らかにした。さらに、“因为”文や“如果”文とは異なる表現機能を持つことも述べている。

第5章では、以上の議論の総括と今後の展望が述べられている。

本研究は、否定による前提を見分けるテストや構文の交換可能性という客観的手段を通じて、複文の情報構造を明らかにしている。この点において、本研究は、中国語の因果関係を表す複文について、今までにない詳細な分析を試みており、新しい知見に富むものである。

審査は二度実施された。第一次審査は2020年12月18日(金)に行われ、審査委員会からは、本研究で用いる前提や焦点の概念について疑義が出され、適切な例文を用いて明確に定義する必要があること、また、一般的な定義と異なる部分は訂正すべきであることが要請された。また、中国語教育やAIへの言及は現時点では不要であること、例文の日本語訳に訂正が必要であることが指摘された。第二次審査はメール会議で2021年1月18日～31日に行われ、申請者が指摘に対して真摯に修正を行ったことを確認し、公開発表会、最終試験に進んでよいとの判定を得た。2月17日の公開発表会は、オンラインで実施された。公開発表会では、40分の論文の概要の説明と、15分の質疑応答が実施されたが、申請者は、論文の内容を明快に説明し、質問に対しても適切に回答を行った。よって、審査委員会は、本論文を、博士(人文科学)(Ph.D.in Linguistics)の学位を授与するに相当するものと判断した。